

機関番号：44417

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2009

課題番号：20720147

研究課題名 (和文) 日本人英語学習者の作文プロセスとプロダクトの発達：
「診断テスト」の開発と配信研究課題名 (英文) Development of Japanese EFL learners' writing processes
and written products

研究代表者

山西 博之 (YAMANISHI HIROYUKI)

関西外国語大学短期大学部・講師

研究者番号：30452684

研究成果の概要 (和文)：2008年度は、作文熟達度の異なる学習者の英作文プロセスとプロダクトには、どのような差異があるか明らかにした。また、それぞれの学習者に対する明示的な指導方法を模索した。2009年度は、得られた指導法を学習者に実施し、学習者の作文熟達度の向上を図った。そして、どのような変容があったかを明らかにした。加えて、学習者の作文プロセス・プロダクトの発達に関する知見を整理し、診断テストの配信準備を行った。

研究成果の概要 (英文)：In the 2008 academic year, I investigated the differences of writing processes and written products of Japanese EFL learners focusing on their proficiency differences. Using the results obtained, I searched for a better method to teach learners in different proficiency. In the 2009 academic year, I carried out classroom-based research to see how effectively the teaching method worked and how the learners' writing developed. In addition, I systematized the knowledge to prepare for developing "diagnostic tests" for processes and products.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：英語教育学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：ライティング、プロセス、プロダクト、発達

1. 研究開始当初の背景

外国語運用能力の発達研究、とりわけ作文や発話といったアウトプット能力の発達研究は多く行われてきているものの、どのような指標から発達を測定するかの設定は困難である。作文の発達研究において、現時点で最も体系化されている研究は、さまざまな先行研究に対するメタ分析である Wolfe-Quintero, Inagaki, and Kim (1998) である。彼らの研究は、作文を「流暢さ」「正

確さ」「複雑さ」という3つの指標から判定することを推奨している。

Wolfe-Quintero et al. (1998)の研究は、作文の発達を、作文のプロダクト(実際に書かれた文章)を上記3つの基準から詳細に分析することで検討している。つまり、「どのような」作文を書いたかで、発達の度合いを判定している。しかしながら、Cumming (1990)が指摘するように、われわれ外国語学習者が英文を書く際には、母語である日本語で考え

をまとめてそれを翻訳したり、限られた言語知識のために書きたい内容と実際に書くことができたことのギャップを感じたり、といった経験をする人が多い。つまり、「どのように」作文を書くか、ということも重要である。

「どのように」作文を書くか、という作文プロセスの研究は、母語、外国語を問わず多く行われてきているが、近年行われた日本人英語学習者対象の研究としては Sasaki の一連の研究 (Sasaki, 2002, 2004, 2006) が代表的なものである。Sasaki の研究では、作文中の学習者のビデオ映像を用い、学習者に事後インタビューを行うことで作文のプロセスを収集している。また、作文のプロダクトも検討の対象にし、プロセスとプロダクトの関連を考察している。ただし、彼女の研究において、作文プロダクトの利用目的は学習者の総合的な熟達度を知ることであるため、プロダクトに関して Wolfe-Quintero et al. (1998) のような詳細な検討は行っていない。

申請者はこれまで、作文のプロセスとプロダクトの両者を相関的に捉える研究を行ってきた現時点では、熟達度の異なる学習者の作文のプロセスの現状把握を可能にするための質問紙の開発が終了している。一方、作文のプロダクトに関しては Sasaki と同様の方法-評定者の判断による主観的評価-を採用してきた。しかしながら、これまでの研究遂行過程で、両者の関連をより詳細に捉えるためには、作文のプロダクトを検討する際に、Wolfe-Quintero et al. が用いたような客観的で多元的な指標が必要であると考えに至った。

2. 研究の目的

まず、申請者がこれまでの研究で開発した作文のプロセスを測定可能な質問紙で得られる知見と、これから実施する作文のプロダクトに対する詳細な検討から得られる知見とを比較することで、学習者の作文のプロセス・プロダクトの現状把握を行う。その結果から効果的だと思われる指導を学習者に行う。最終的には、学習者の作文のプロセス・プロダクトの発達に関する知見を体系化し、指導や評価のための発達モデルを構築する。そして作文プロセスとプロダクトを判定可能な「診断テスト」を開発し、オンラインで配信する準備を整える。そうすることで、利用者(学習者および教員)に対して、例えば「あなたの作文には〇〇といった特徴がありますので、このようなことを意識すると効果的です」(利用者が学習者の場合)といったアドバイスを提供することが可能になる。

3. 研究の方法

2年間の研究期間を以下の3段階に分けて、

研究を遂行した。

(1) 第1段階 (平成20年度)

目的:「作文熟達度の異なる学習者の作文プロセスとプロダクトには、どのような差異があるか明らかにし、明示的な指導方法を模索する」

①申請者が開発した質問紙をより教室での使用に適した形式・内容になるよう、修正を行った。そして、修正版の質問紙を用いた調査をおこない、作文プロセスに関する知見を得た。

②①で得られた作文データも同時に収集し、それに対する分析を行い、作文プロダクトに関する知見を得た。

③上記の分析を学習者の作文熟達度ごとに捉え、熟達度に応じた作文のプロセス・プロダクトの特徴把握を行った。

④熟達度の異なる学習者に対する効果的な指導方法の斟酌を行った。

(2) 第2段階 (平成21年度)

目的:「第1段階で得られた指導方法を実施し、学習者の作文熟達度の向上を図り、その際に個人内にどのような変容があったか明らかにする」

①異なる作文熟達度の学生に対して効果的であると考えられる指導を、実際の教室において行った。

②プロダクトに関する指導の効果(「発達」の有無)を Wolfe-Quintero et al. (1998) の指標を用いて検討した。

③併せて、プロセスに関する指導の効果を申請者が開発した質問紙によって検討した。

(3) 第3段階 (平成21年度)

目的:「学習者の作文プロセス・プロダクトの発達に関する知見を整理し、オンラインで利用可能な「診断テスト」の配信準備を行う」

①知見の整理・発達モデルの構築のために、質問紙調査等を継続して実施した。その結果から、作文熟達度ごとの傾向を把握した。

②「診断テスト」の試作・試運用のために、サーバー用 PC と関連ソフトウェア、そしてそのために必要な書籍等を購入し、準備を行った。

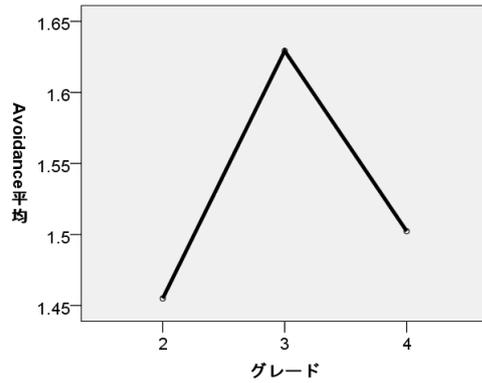
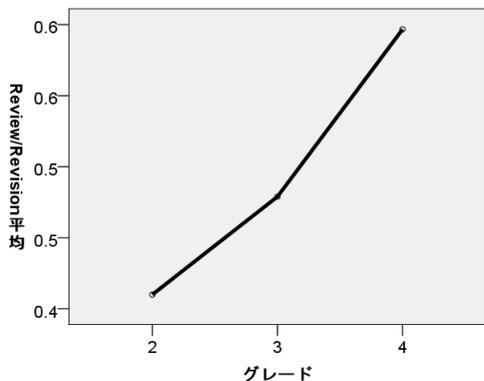
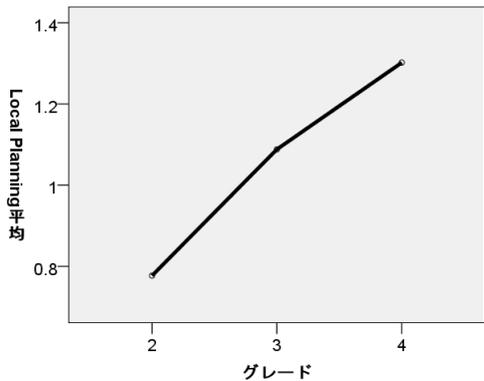
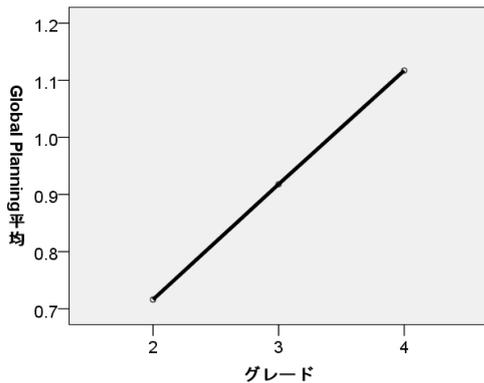
4. 研究成果

(1) 質問紙の改良

作文のプロセスを測定するための質問紙を修正し、より適切な形式・内容を持つ修正版の質問紙を得た。この質問紙は Global Planning (作文の全体的な計画), Local Planning (作文の部分的な計画), Review/Revision (作文の書き直しに関する方略), Avoidance (作文における回避方略) に関する 33 項目からなる。

(2) 作文プロセスの調査結果

上記質問紙を用いて、日本人英語学習者 179 名の作文プロセスを調査した結果は、以下の通りである。

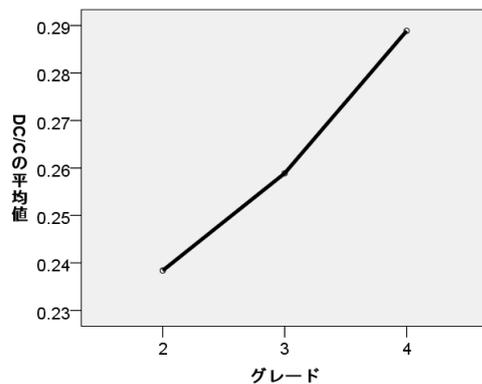
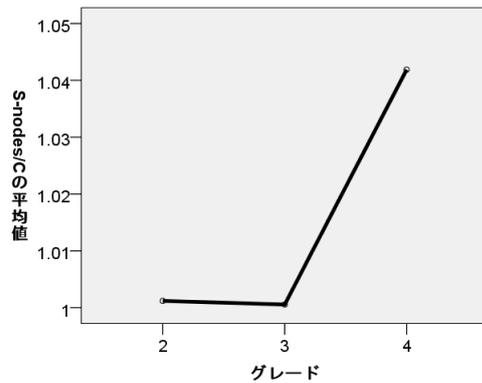


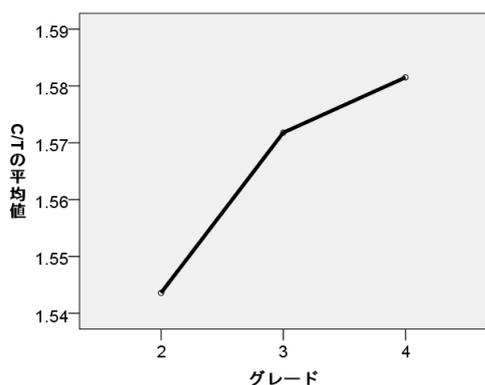
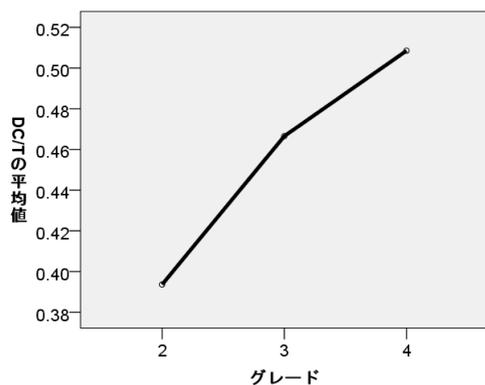
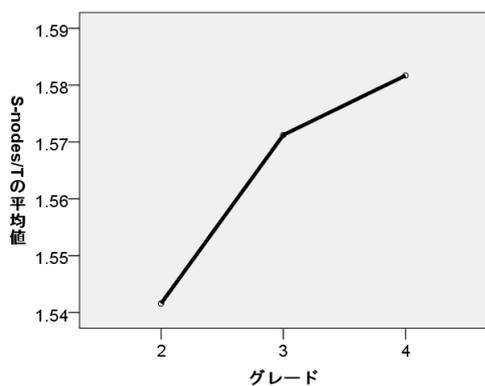
ここから、Avoidance 以外は、質問紙で測定された作文のプロセスと、作文熟達度は正の相関関係にあることが明らかになった。併せて、Avoidance に関しては、項目の反転が必要な項目がいくつかあることが明らかとなった。

紙幅の都合上、詳細な結果をここで示すことはできないが、それぞれの熟達度の学習者が質問紙の 33 項目のそれぞれにどのように回答したかに基づいた詳細な検討は、Yamanishi (2009b)においてなされた。

(3) 作文プロダクトの調査結果

同じ学習者の作文を Wolfe-Quintero et al. (1998)の基準の内、構造的な複雑さに関する 5 つの指標を用いて分析した結果は、以下の通りである。これらは C (Clause=節)あるいは T (T-Unit=1つの主節とそれに付随した従属節から成る単位)を基準としたものである。





この指標から明らかなように、Wolfe-Quintero et al. (1998)の客観的で多面的な指標からも、作文の熟達度に応じた発達が確認された。換言すると、作文のプロセスの質問紙と Wolfe-Quintero et al. の両方、あるいはどちらか一方を用いることで、学習者の作文熟達度の予想ができることが明らかとなった。

(4) 授業実践に基づく発達の確認

これらの事柄を確認した上で、2009年度に申請者が担当するクラスでの授業実践を行った。授業は、プロセス・アプローチの手法を採り、パラグラフライティング、プロセスライティングの方法を学習者に指導した。その際に、上記結果で得られた知見を指導に組み入れた。また、作文の熟達度を測定する代替の方法として、授業開始時に行ったプロセ

スの質問紙調査の結果を用いた。

指導の一例を挙げると、作文熟達度が低いプロセスの質問紙の回答の値が低い)学習者に対しては、全体的な計画(Global Planning)の重要性をしっかりと説明したり、書いた作文の見直し(Review)やそれに基づいた書き直し(Revision)が重要であることを説明した。クラス内で相対的に熟達度高い(質問紙の回答の値が高い)学習者においても、値の低かった項目をより意識して書くように指導を行った。

このような指導を前期と後期をまたいで半年間行い、指導開始時と終了時に書かせた作文に対して Wolfe-Quintero et al. (1998)の指標を用いた検討を行った。その結果、多くの学習者の作文において、発達が見られた。また、終了時に再び測定したプロセスからも、彼らの英作文の発達が確認された。

(5) 「診断テスト」の開発・配信準備

これらの調査から明らかになった知見を整理した。その結果をもとに、主にプロセスの質問紙項目への回答を行うことで簡易的に作文の熟達度を診断するための「診断テスト」の開発に着手した。具体的には、「診断テスト」の試作・試運用を、サーバー用 PC と関連ソフトウェアにより行った。本格的な配信・公開には、今後さらなるデータ収集とシミュレーションを行う必要があるが、近日中の公開を目指している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① YAMANISHI Hiroyuki Developing a Questionnaire to Assess Japanese High School Students' Writing Strategies for Expository Compositions: A Pilot Study. *Studies in English Language Teaching*, 32, 33-42, 2009a. 査読有
- ② YAMANISHI Hiroyuki Japanese EFL Learners' Use of Writing Strategies: A Questionnaire Survey. 『JACET 関西支部ライティング指導研究会紀要』8, 53-64 2009b. 査読有

〔学会発表〕(計2件)

- ① 山西博之 「日本人英語学習者のライティングにおける方略使用、熟達度、複雑さの関係」『全国英語教育学会鳥取研究大会』2009年8月9日(鳥取大学)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山西 博之 (YAMANISHI HIROYUKI)
関西外国語大学短期大学部・講師

研究者番号：30452684

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：